

鴻 koh

月刊俳句誌

平成28年5月1日発行

(毎月1日発行)

第15巻第5号 通巻167号

5 月号

2020



越に春祭のごとく雪が降る

雪吊りの縄ほどくとき雉子鳴く

前をゆく蝶よ雀よ島遍路

築山にじいんじいんと春がくる

近江八景ところどころの霜くすべ

弁天の寺のつらつら椿かな

ふうはりと陽炎の立つ芹の川

ふらここに座しふらここの風を聴く

雛の日の富士うつくしく晴れ上がる

春よ春人に後れて野を歩く

チューリップ一莖一花なるがよし

母子草虻の羽音を耳許に

岬に来て一と日を鷹と遊びけり

# 春よ春

主宰作品

増成栗人

# 詩 作品抄

まんさくや夫の日記にあるわたし

林 未生

白鳥の翔つとき白の極まれり

西條弘子

黄水仙気づかぬほどの風の来る

藤原明美

日高見の国よ綺羅なる春の雪

山崎正子

もてなしは三河の海の浅蜷汁

伊藤真代

閉めきつて鷗外荘の春障子

水沢和世

菜の花の土手にひと日を使ひ切る

森 祐司

使はれぬ部屋の窓辺のフリージア

青木まゆ美

冬うらら踊子の舞ふオルゴール

井上つぐみ

画仙紙にペーパーナイフ入れ臙

横尾かな

節分が創業の日よ鳶の笛

村手雅子

漁の舟一艘が束風の

中村上栄子

紅梅に佇ち水仙に屈みけり

山内宏子

契約書に甲乙魚は氷に上る

三代川朋子

木製のベンチにふたり卒業期

荒井一代

雪催アールグレイの香の立てり

鈴木 崇

満月を落としてみたき冬の湖生

井ちよみ

シベリウスをひとり聴く夜雪来るか

山岸明子

茂吉忌や猫には猫の出入口

北村 操

白鳥が白鳥を呼ぶ霧の中

山口優子



## 『芥川龍之介句集一タビリ』

草間時彦・編 ふうらんす堂・刊



ウィルス禍のある夜、本棚を物色している、一冊の薄い文庫本が目にと留まった。一九九三年にふうらんす堂が刊行した『芥川龍之介句集一タビリ』は、精選句集シリーズの一つ。他には『久保田万太郎句集一こでまり抄一成瀬櫻桃子・編』、『芝不器男句集一麦車一飴山實・編』、『野見山朱鳥句集一朱一野見山ひふみ・編』、『前田普羅句集一雪山一中西鋪士・編』などがある。編集に後世の俳人が加わり、精選された佳句が収められていて、どれも味わいが深い。

何冊か持っているシリーズのうちで、芥川龍之介が気になった。手に入れたすぐに読んだものの、その後はまったく開いていない。芥川の俳句については、全体に古色蒼然としたイメージを強く持っていた。その一方で、「蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな」や「青蛙おのれもペンキぬりたてか」などの有名な句には、どこか現代的な感覚がある。この不思議な

らうとずっと思っていたから、この際、読み直してみることにした。「秋風や嵯峨をさまよふ蝶一つ」「星月夜岡につく、立つ武者一騎」「八朔の遊女覗くや青簾」「水打てば御城下町の句かな」非常にうまくまとまっていて、格調が高い。まるで江戸俳諧である。芥川が作句を始めたのは、大正中期だった。その頃は正岡子規の後を継いだ河東碧梧桐が新傾向俳句を掲げ、自由律にまで走ったが、その勢いが衰え始めた時期だった。

から強い影響を受けていただろうから、江戸俳諧の香りはここから生まれたのだと思われる。『芥川龍之介句集一タビリ』の編者・草間時彦がこの本の解説で、芥川の周囲には新傾向俳句の影響が及んでいなかったと指摘しているが、先ほど挙げた芥川の句はまさにそのとおり。

おりの体を成している。そして僕が持った古色蒼然としたイメージは、このあたりから来ていると思われる。「秋立つ日うる歯に銀をうつめけり」

「暁闇を弾いて連の白さかな」

「暖かや蕊に蠟塗る造り花」

今回、拾い直した句の一群である。確かに古色ではあるが、どこかに現代性を宿している。「秋立つ日」に潜む「銀」・「闇」を弾く「白」・塗られる「蠟」の「暖かさ」など、輝くような言葉の遣い方に目を見張る。これは、芥川の文学者としての才能だろう。やたらと新しさを狙うのではなく、正攻法での作句ながら、新鮮な表現になっている。江戸俳諧が衰退していく時期に、芥川は江戸俳諧の未知の可能性を示そうとしていたと言えるかもしれない。

「あさあさと麦藁かけよ草いちぢい」

「花降るや牛の額の土ぼこり」

「花散るや寒暖計は静なる」

今回、読み直してみても、これらの優しい句の存在にも気付かされた。「あさあさと」かける麦藁の感触、花屑と「土ぼこり」の穏やかな対比、もともと音のしなやかな「寒暖計」の静けさなど、事象に対する芥川の優しい眼

差しが共感を呼ぶ。これらの句が、やがて「初秋の蛙つかめば柔かき 龍之介」という傑作に繋がるのではないかという発見があった。

「灰捨つる路に槐の莢ばかり」

「切支丹坂を下り来る寒さ哉」

「魚の眼を箸でつつくや牙返る」

「秋風や黒子に生えし毛 根」

鋭敏な句も見つけた。「灰捨つる」の句は「北京」という前詞がある。昔の北京の人々は主に石炭ストーヴで暖を取っていて、ロンドンと並んで煤で汚れた街として知られていた。その路地が、槐の莢で埋め尽くされている。都市ならではの感情の乾きを、莢に託したところが非常にモダンである。

芥川は「水漬や鼻の先だけ暮れ残る」や「兎も片耳垂るる大暑かな」など暑さや寒さを詠むのに長けていたが、「切支丹坂」は言い得て妙。「魚の眼」の句もまたそれに準じている。「秋風」の句は、ホククからひよると生えた毛がペーソスを感じさせ、芥川が小説では表現してこ

なかつた情緒があつて面白い。

こうした芥川の句を、時彦は「型の見事さと、洗練されたレトリックである。(中略)型を守っていないながら、その型に盛られた内容はまことに香りが高い」と評している。型を守るあまり、類型や類想に陥る俳人は少なくないが、芥川はそこから見事に飛翔した。さらに時彦は「龍之介の俳句の師を求めると、松尾芭蕉以外に存在しないのである」と断言する。

明治の新傾向運動をよそに、直接芭蕉に学んだ芥川の俳句は、いっそ潔い。外出自粛の夜に、喧噪から離れて読むには、最適の一冊だった。なおこのシリーズは手作りの製本Ⅱフランス装が為されていて、手軽に持ち運べる一冊ながら、少し豪華な気分が味わえる。今回の自粛で本というメディアの有り難さと、本棚という検索システムの楽しさを改めて認識したのだった。「立ちどまり顔を上げた冬至かな」

時彦

## 西條弘子

安達太良の雪湯の里へ一夜旅  
 鳥けもの寝ねたる山に冬の月  
 建国の日や蘆原の風の音  
 ストープの薬缶ぶつぶつ雪となる  
 初午の太鼓囃子のたけなはに  
 駐在も道化てゐたる午祭  
 午祭果てたるあとの月明り  
 初午の獅子うつくしく舞ひ納む

枯蘆の刈られ北上川の暮  
 臘梅の一枝を提げて男くる  
 芽吹き初む一樹に結はふ神籤かな  
 春の雪牛舎の扉半開き  
 金平糖ぼりぼり噛んで春の暮  
 雛の日の午後のチャイムのくぐもれる



初午は無病息災と火伏せのお祭りです。天狗、獅子舞、道化は各家々に上がりホーホーと叫びながら家中の厄払いをして回ります。



「保谷・リスペクトする先人たち」鈴木 崇

東京勤務の十年ばかりの間は、西武池袋線沿線で暮らした。東京都下の西東京市、旧・田無市と旧・保谷市が合併してできた市で、私が住んだのは旧・保谷市側だった。

保谷駅前から伸びるかえで通りを少し歩くと、歩道の脇にひっそりと掲げられているプレートがあった。「民族学博物館発祥の地」と書かれている。民族学博物館とは、現在、大阪府吹田市にある国立民族学博物館の前身である。地元の民俗学研究者・高橋文一郎と第一銀行総裁であり民俗学の振興をサポートし続けた渋沢敬三によって設立され、民族学研究の拠点となった。民族学と民俗学は異なる学問領域であるが、渋沢は二つを車の両輪で同時にやるべきと考えていたという。

渋沢の支援を受けていた民俗学者・宮本常一も博物館に通って仕事をしていた。宮本の代表作『忘れられた日本人』は私の愛読書の一つ。庶民の生活誌を記録することに情熱を燃やした研究者の拠点が近辺にあったことに感動する。一週間ぶんのワイシャツを抱えてクリーニング

屋に向かう道を歩きながら、ここをアノ宮本常一も歩いていたのか、と静かに興奮したものだ。

保谷には戦後詩を代表する詩人・田村隆一も一時居住んでいた。なんと「保谷」と題した作品を残している。

灼熱の夏がやっとおわって／秋風が武蔵野の果てから果てへ吹きねけてゆく／黒い武蔵野沈黙の武蔵野の一点に／ぼくのちいさな家がある

「西東京市の木」のケヤキが私の住むマンションの近くにもあり、武蔵野の面影を身近に感じられた。

無個性な住宅街ではあったが、リスペクトする先人たちにゆかりのある土地だということに思いを馳せることができたのは貴重だった。

沿線の大泉学園駅や石神井公園駅を途中下車してよく歩いた。

大泉学園には植物学老・牧野富太郎の旧居跡が「牧野記念庭園」として一般公開されている。メール句会に参加するようになった頃、吟行し

ていた。植物には名札が付いていたので、草花の名前に疎い者にはありがたかった。

園内にある牧野の銅像はスエコザサに囲まれている。献身的に支えた妻・壽衛の名が付けられた笹だ。愛妻家なのである。

世の中のあらゆる限りやすえ子笹  
牧野富太郎

石神井公園も句材を探すには格好の場所だった。三宝池は野鳥の集まる原生林に囲まれており、住宅街の真ん中とは思えぬ自然環境に出会えた。練馬区指定の「ねりまの名木」が公園内には立ち並んでいる。特にポート池ほとりのラクウショウは秋になると紅葉かつ散る姿が美しかった。



大泉学園・牧野博士像と



羽音集

増成栗人 選



黄水仙気づかぬほどの風の来る  
木の芽木の芽一分ほどの嬰の動画  
枝垂梅ふれあふやうに風通る  
雉子鳴く吸入剤の処方せん  
桃の花短き会釈交ししけり  
水面鏡覗きて空の青さかな  
複写機の光洩れくる寒の明け  
春立つや書店の棚の新刊書  
使はれぬ部屋の窓辺のフリージア  
春の日や軽く握りし花鋏  
風花の明るき日なり母の忌来  
シベリウスをひとり聴く夜雪来るか  
猫とふと目の合ふバレンタインデー  
空洞の一木の枝に梅の白  
茂吉忌の末黒野に日の沈みゆく  
雪富士を背にシャッターを切るテラス  
田原城へ初めての道春隣  
白梅や渡辺畢山最期の地  
節分が創業の日よ鳶の笛  
とつとつと引く鍵盤よ風光る

船橋 藤原明美

札幌 青木まゆ美

松戸 山岸明子

豊川 村手雅子



# 茶庵閑話

23

丸 1111111111



ハールハ  
ドコカラ  
ランラン  
♪  
時行も  
心掛ける  
みづにと  
言われましたが  
時行のみいよこさって  
なんでしゅらっ



俳句に慣れて  
くると上手に  
なったぶん  
机の上の句作り  
では句が整えられ  
がちになる  
とこみか  
言葉は古きに  
理屈を越えた  
ナマな部分を  
持つ  
そこが俳句  
の魅力にも  
なる



時行では  
目の前のもの  
から五感で  
感じたままを  
言葉にするほかはない  
それが  
机上の  
句への  
気つけない  
表現につながる  
ことがあるんだ  
フーン  
ナマナマ



タケノコ  
ばかり  
じゃなく  
竹の  
ほうも  
齧って食べて  
いってあげて  
お